

十六歳の死

国分長次

四十九年春の卒業式を終えて間もない十七日、教え子のA君より電話があった。「先生!! Y君が死んだ。」「……」私は絶句した。予期されないあまりにも冷酷な言葉である。

Y君は、私の担任した生徒の一人であり、つい最近、数回私を訪ねて来たばかりである。若き農業後継者として農業の多角經營を目指し農業高校へ通学していたが、原因不明の病氣にかかり六月以来それと闘っていた。中学校時代にはバケットの選手として人一倍のファイトの持ち主であったが、私を訪ねたときはあのがつしりした体格の面影はもうなかつたことが記憶になまなましい。

A君からの電話ですぐ車をとばした。うそであつてくれと願いながら玄関に立つたとき、見苦しい姿を見てしまふに悲しみをこらえていた父親のほおに、突然止めどもなく涙が伝わるのを見た。私はなすべきことを知らないまま父親の両手をただ黙つて握つた。今になつてみると自身自分の体力の限界を悟つていたのだろう。自分の将来のことくだれに相談することもなく一人でじつと悩み続けていたのだろう。

高校だけは卒業したい、その一心からばかりではない私は「多分高校一年での転校はない、再受検するしかない」と言つてしまつた。あのときのがつかりした顔が忘れられない。なんで彼の体のことを探つた。あのときのがつかりした顔かも知れないと思うと、はらわたのちぎれる思いである。

二回目に私を訪ねたとき、「先生、何か参考書ありますか?」私は手もとにあるものを与えた。あのとき彼は再受検する決意をしていたのだろう。やすらぎと、明るさが、その顔にもどつていた。「Y君、早くよくなれよ。まず健康第一だ、一年や二年がなんだ、健康になつてからでもおそくはない、早くなせよ。」これが彼との最後の言葉となつた。しかし死に直面している彼にとっては時間の余裕はなく、進学希望抑えがたく勉強を始め十六歳の生がい神もボロボロに疲れていたことだろう。

当時学級委員長であったA君がすぐ

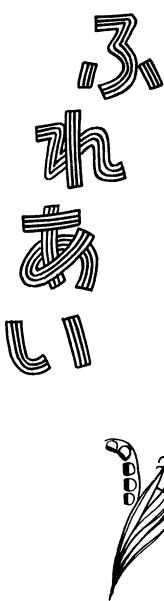
クラスの友人たちにY君の死を告げ、数名のものが遺体の前に合掌しながらその急死にただぼう然としていた。彼らは彼らなりにY君への弔意を示そうと東ほん西走し、花輪をささげようと思談して來た。私もそうあるべきことを告げ担任として万端整つたことを自負していたが、その夜のことである。

他のクラスだったSさんから怒つたような電話を受け取つた。「先生私達はなぜませてもえないのでですか?」この

Y君は天国でこの、同級生の暖かい言葉に私は返答を失つた。教師として考へが狭かつたこと、クラス内だけに閉じこもつてゐる自分に恥ずかしさを覚え赤面した。絶えず学年は一体だ、クラスに壁があつてはならないと主張していた私は今どこに行つてしまつたのか。自分のいいかげんさに驚くと同時に私は教師としてのうれしさを

Sさんの言葉に感じた。Y君の死に際して、眞の同級生の道徳的心情と、死を悼む一つの心を私は知つた。告別式当日、八十数名の友人たちが参集した。あるものは学校を早退し、またあるものは運動をやめ、就職したものは遠くからかけつけたのである。Y君の思い出を胸に秘め一人一人が心からめい福を祈つた。『同級生一同』の花輪が一段と大きく目に映つた。だれの発案か

教育隨想



(安達郡本宮町立本宮第二中学校教諭)